

授業プラン（対象：小学校 5 年生以上）

2009 年 1 月 29 日 初版
2011 年 10 月 29 日 (1.2.0)

©科学的授業実践研究会



わらべつのなかの神様

杉^{すぎ}
みき子
作

年 組

名前

ご使用に当たって

この授業プラン「わらぐつのなかの神様」は、科学的授業実践研究会が提供する児童用テキストです。このプランには、いくつかの特徴があります。

このテキストは、児童への配付の際は、学習を終える毎に、一枚ずつまたはあるまつまり毎に数枚ずつ渡していきます。最初から全てのページを渡したりはしません。既にこの物語を読んで物語の筋を知っている児童もいるかと思いますが、それでも少しずつ渡していくことには意味があります。おそらくどの子ども、一枚ずつかあるまつまり毎に数枚ずつ受け取ることで、物語の展開に強く関心を寄せるようになることでしょう。

この授業プランが製本されていないのは、そもそも印刷して渡すことを前提にしているからです（バラの状態でない印刷の時に苦労しますね）。授業プランはA5版で提供していますが、拡大してB5版にすると更に使いやすくなります。ところで、子どもたちは、このバラのプリントを受け取って学習を進めていきますから、紛失しやすくなります。そこで、チャック付きのポリ袋を子どもたちに持たせて、それに入れさせるのも一つの方法です（ファイルよりも嵩張らず、机の中や鞆の中に入りやすいでしょう）。

本文の表記については、作者の表記を尊重する考えから、現在入手可能な童心社発行の『かくまきの歌』（フォア文庫）を元にしています。この元の文章は、漢字が少なくとても読みやすく書かれています。

このテキストでは、子どもたちに新しい学習活動を行わせる際は、その学習活動について説明をしています。それにより、指導者は学習活動の仕方について、特別に説明を付け加える必要はありません。これは、どの指導者がこのプランを利用しても、子どもたちがほぼ同じ理解に達することをめざしたものです。ですから、逆に言えば、このプランの中の説明の仕方、常に一定数の理解できない児童が出てくるとしたら、この説明の仕方に問題があることになります。そうであれば、もっとわかりやすく書き

直したり、書き加えたりする必要があることとなります。

授業プランは、作業付きの解説の部分と本文の部分から成り立っています。1単位の授業は、この両者で構成されます。

学習活動には、「書きこみ」「書き出し」「音読」「くわしい話しかえ」「短い話しかえ」「小見出し」「話し合い」「表現読み」があります。

「書きこみ」「書き出し」「くわしい話しかえ」は、文章をよりイメージ豊かに読む過程であり、具象化・表象化・分析の過程と言えます。「短い話しかえ」「小見出し」は、抽象化・総合の過程と言えます。「表現読み」は、読み取ったことを、表象豊かに声に出して読むことによって、学習をまとめていく過程です。これらは、大きく区分すると、「ひとり読み」と「集団読み」とに分けることができます。

「ひとり読み」はひとり勉強とでも言うべきものですが、この授業プランでは、とりわけ「書きこみ」は大変重要な位置を占めます。学習を始めるに当たり、「まず初めに子どもの読みありき」なのです。書きこみを通して主体的な読みを促し、これを以後の学習のベースにしています。

「集団読み」は「話し合い」で行います。話し合いでは、特に指導者による方向づけが重要です。ただ、指導者が子どもの発言を評価する際には注意が必要です。子どもたちが教師の反応を伺って発表するようにしてはいけません。指導者は、子どもから問題を含む発言があっても、直接のコメントを控えるのが原則です。子どもの中からそれについての発言が出てくるのを待つと良いでしょう。指導者による話し合いの方向づけとは、子どもの中から発言が出てくるように暗に導くことです。どうしても、子どもたちの話し合いの中で、解決できなくてコメントしておかなくてはならないことが残った場合は、話し合いを聞いての感想として、後で適時話をすれば良いでしょう。原則は、子ども同士の話し合いを膨らませることです。

こうした話し合いの方向づけについては、このテキストの中ではプラン化していません。例え話し合いのテーマがあったとしても、その学級の子

どもたちが、どのような順で、どのようなことを発表するかは一概に予測できないからです。この点では、授業記録による授業分析を期待します。

言葉の意味については、国語辞典による意味調べを廃しました。本文中にあらかじめ語句の意味を書きこんでいます。このことにより、意味調べに要する時間を節約できるようにしています。また、わらぐつと雪下駄については、特別にページを起こして説明をしました。

漢字の扱いについては、5年生配当の漢字には全て振り仮名を振っています。また、提供本では5年生配当の漢字を赤色で印刷しています。このことにより、5年生であれば、学年のどの時期に学習しても、このプランを学習する上で、支障がないようにしています。該当漢字の掲載に当たっては、次の約束があります。解説と本文は別々に、初めて出てきた時の5年生配当漢字のみを対象として赤字にしています。また、振り仮名がついていても、5年生配当ではない漢字もありますが、その場合は初めて出てきた漢字でも黒色です。なお、本文は原本の表記に従っていますので、5年生の配当漢字は3文字のみです。そのため、このテキストで漢字の学習を意図する場合は、解説の箇所の新出漢字で行えるようにしています。また、ご使用の教科書通りに新出漢字を指導する場合には、別個取り上げるか、原文のその箇所で漢字に書き換えさせるとよいでしょう。

『わらぐつの中の神様』は、2011年度版の教科書では、光村図書の5年下のみに採用されています。配当時間は、2月から3月にかけての7時間となっています。ですが、本プランを7時間で学習することは不可能です。このことをどう考え、授業化するかは指導者にお任せするところですが、科学的授業実践研究会としては、このプランに十分な時間をとることで、基礎的な国語の力を身に付けさせることができると考えています。

このプランを学習し終えた子どもたちが、文学の読み方がわかり、自分の言葉で考えることや、とりわけ書くことに抵抗を感じなくなることを期待します。そして、何よりも、子どもたちが学習に生き生きと参加する姿を垣間見ることができればと思います。

学習活動一覧（全18時）

わらぐつ・題名読み・立ちどまり①《p.1～5》(0.75時)

「わらぐつのなかの神様」

「雪がしんしんと……雨戸にあたっては落ちていきます。」

〈わらぐつ〉について

題名から思い浮かんだことを書く と【話し合い】

解説「『立ちどまり』と『書きこみ』」

【書きこみ】

立ちどまり①《p.6～13》(1.25時)

「雪がしんしんと……雨戸にあたっては落ちていきます。」

解説「作者と語り手」

自分の書きこみをふり返ってみよう(1) 解説「描写とその言葉の意味づけ」

【問題1】「……泊まり番でかえってきません。」は描写表現か

【問題2】「……さっきおふろ屋へでかけていきました。」は描写表現か

【話し合い】

自分の書きこみをふり返ってみよう(2) 解説「説明」

【書き出し】おじいさんと家族の関係について と【話し合い】

【音読】

立ちどまり②《p.14～22》(1時)

「マサエはふと思いだして……まだ、びしょびしょみたいだよ。」

【書きこみ】

解説「会話」

解説「視点」

解説「読み手主体の読み」

【音読】

【話し合い】マサエについて

【書き出し】マサエを外側から見た評価も含めて

立ちどまり③《p.23～29》(1時)

「すると、茶の間のこたつから……迷信でしょ、おばあちゃん。」

解説「大人も書きこみをする」

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】

《テーマ1》「やだあ、……金具にはまらんわ。」の箇所の書きこみ

《テーマ2》「そういったもんでも……神様がいなさるでね。」の箇所の書きこみ

解説「くわしい話しかえ」

【くわしい話しかえ】マサエにわらぐつや神様についてもっと詳しく話させる

【話し合い】

【音読】勉強したことを頭に浮かべてゆっくり読む

立ちどまり ①～④ 《p.30～36》(1.5時)

「おやおや、なにが迷信なもんかね……こんな話をはじめました。」

【書きこみ】

解説「短い話しかえ」

【短い話しかえ】物語の初めからここまで と【話し合い】

解説「小見出し」

【小見出し】 と【話し合い】

解説「音読と表現読み」

【表現読み】

立ちどまり⑤の1 《p.37～38》(0.5時)

「——むかし、この近くの村に……村じゅうの人たちからすかれていました。」

【書きこみ】

【音読】

【くわしい話しかえ】村の人になって、おみつさんを紹介 と【話し合い】

立ちどまり⑤の2 《p.39～48》(2時)

「さて、このおみつさんが……よびかけているように思われました。」

〈雪げた〉について

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】

《区分1》③(雪げた)の箇所の書きこみ

《区分2》⑥の箇所の書きこみ

【くわしい話しかえ】おみつさんになって、心のつぶやき と【話し合い】

【話し合い】

《区分3》⑦の箇所の書きこみ

【立ちどまり⑤全部の短い話しかえ】 と【話し合い】

【小見出し】 と【話し合い】

【表現読み】

立ちどまり⑥《p.49～53》(1時)

「家にかえったおみつさんは……その夜、おみつさんは考えました。」

【書きこみ】

【音読】

【短い話しかえ】

【小見出し】

【予想】おみつさんが考えたことは？

〈予想の根きよ〉

〈予想〉

【話し合い】

【表現読み】

立ちどまり⑦《p.54～58》(1時)

「(うちの暮らしだって……元気よく町へでていきました。」

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】

《区分1》③の箇所の書きこみ

《区分2》④の箇所の書きこみ

【くわしい話しかえ】③から⑤までをおみつさんになって と【話し合い】

【小見出し】 と【話し合い】

【表現読み】

立ちどまり⑧《p.59～62》(1時)

「げた屋の前をとおるとき……ぶさいくなわらぐつを見つめました。」

【書きこみ】

【そう作話しかえ】おみつさんからわらぐつをすすめられたお客として（主に「会話」と「描写」と【話し合い】）

【小見出し】

【表現読み】

立ちどまり⑨の1《p.63～64》(0.5時)

「やがて、お屋近くになって……つくんなったのかね。」

【書きこみ】

【話し合い】

《テーマ1》大工さんについての書きこみ

《テーマ2》おみつさんについての書きこみ

【問題3】わらぐつをかうと思いますか

【話し合い】 どうしてそう考えたか

立ちどまり⑨の2《p.65～67》(0.5時)

「はあ、おらがつくったんです……おがみたいような気がしました。」

【書きこみ】

【短い話しかえ】立ちどまり⑨の1と2と【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】

立ちどまり⑩の1《p.68～71》(0.5時)

「そのつぎの市の日までに……もうしわけなくて……」

【書きこみ】

【予想】大工さんの答え

〈予想の根きよ〉

〈予想〉

【話し合い】

解説「予想することの楽しみ」

立ちどまり⑩の2《p.72～73》(0.25時)

「すると、大工さんは、にっこりして……きゅうにまじめな顔になっていました。」

【書きこみ】

立ちどまり⑩の3《p.74～78》(0.75時)

「おれは、わらぐつを……夕焼けのように赤くなりました。」

【書きこみ】

【音読】

【くわしい話しかえ】おみつさんになって心のつぶやきを と【話し合い】

【問題4】およめに行ったのでしょうか と【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】

立ちどまり⑩の1《p.79～82》(0.5時)

「——それから、若い大工さんは……しあわせに暮らしてるよ。」

【書きこみ】

【書き出し】「神様」について

【話し合い】「神様」とはどういうことなのでしょう

【ひみつの書き出し】何かピンとくるものがあった人

立ちどまり⑩の2《p.83～85》(0.5時)

「暮らしてる?……あの箱をもってきてごらん。」

【書きこみ】

【予想の書き出し】と【話し合い】

立ちどまり⑩の3《p.86～90》(1.5時)

「マサエは、すぐふみ台をもってきて……〔終わりまで〕」

【書きこみ】

【書き出し】マサエは、雪げたの中に何を見たのでしょうか と【話し合い】

【そう作話しかえ】マサエがおじいさんを出迎えた時の様子を想像して

【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】物語の初めから終わりまで

まとめ《p.91～96》(2時)

解説『「全文感想・意見」と「副題」つけ』

〈もうひとつの雪げたのお話〉

わらぐつ

わらとは、いねや麦などのくきをほしたものです。このわらを使って作ったはきもののことを「わらぐつ」と言います。

わらぐつには、はく目的によっていろいろなものがあります。このテキストの表紙の写真は、わらぐつの中でも「ふかぐつ」とよばれているものです。

このふかぐつも、地方によっていろいろなものがあり、また、名前も「ふかぐつ」以外のいろいろなよび方があります。



日本はきもの博物館（広島県福山市松永町）にて展示されている各地のふかぐつ

このわらぐつは、雪の深い地方で、主に仕事をするときや遠くへ行くときに使われました。中にわらくずを入れ、はだしではきました。

「立ちどまり」と「書きこみ」

『わらぐつのなかの神様』を読み始める前に、二つのことをお話しします。

①私たちが、読書をする時、その本が特に物語の場合には、どのようにお話が進んでいくか、ハラハラドキドキしながら読んでいきます。それは、本を読む時のとても大きな楽しみのひとつです。

この勉強では、最初に物語の終わりまでを読んだりはしません。ふ通の読書のように、前から順に少しずつ読んでいって、次がどうなるのかを楽しみにしながら、できればみんなといっしょに、ハラハラドキドキしながら、読んでいきます。

そのため、この物語をあるまとまりごとに区切って読んでいきます。そして、その区切りごとにくわしく読むことにします。この区切られたまとまりのことを「**立ちどまり**」と言うことにして、「立ちどまり①」「立ちどまり②」……というように番号を付けてよぶことにします。

②文章を読む時には、ひとつひとつの言葉に**はんのう**反応して、意味を考えたり、イメージをふくらませたり、まとめてみたり、ぎ間に思ったりしながら読んでいます。だれもが自分の頭の中にいろんなことを思いえがきながら読んでいます。

そこで、この物語の勉強では、文章を読んで思いうかんだことを書き^と留めておくことにします。文章の横に思ったことを文にして書きこんだり、言葉の横に線を引いたり、言葉を丸でかこんだりします。

この作業のことを「**書きこみ**」と言うことにします。「書きこみ」をすることで、ぼんやりしていたことが、よりはっきりしてきたり、さらに新しいことに気づいたりします。

この「書きこみ」は、自分の読みの力をより^{たし}確かなものとするためにします。だれかに見てもらうのが目的ではありません。自分の読みのメモ書きとってください。

これから、立ちどまりごとに文章を読んでいきますが、文章との最初の出会いから、「書きこみ」をしながら、自分の力で読み進みましょう。

それでは、「立ちどまり①」の文章を読んでみましょう。

立ちどまり①：雪がしんと……雨戸にあたっては落ちていきます。

7つの文があり、それぞれに①から⑦までの番号をつけています。

①雪がしんしんとふっています。

②マサエは、おばあちゃんといっしょに、こたつにあたりながら、本を読んでいました。

③今夜は、おとうさんは泊まり番でかえってきません。④おふろずきのおじい

ちゃんは、「この寒いのに……」と、みんなにわらわれながら、さつきおふろ屋

へでかけていきました。⑤あとは、おかあさんが台所で夕ごはんのあとかたづ

けをしている音がきこえるだけで、あたりはとてもしずかです。

⑥風がでてきたらしく、窓のしょうじがカタカタと鳴りました。⑦雪がさらさ

らと雨戸あまどにあたっては落ちていきます。

作者と語り手

この物語の作者は、先にしょうかいしたように杉みき子さんです。物語では、ふ通、作者が頭の中で考えた「人物」や「生き物」や時には「物」に話をさせて、お話を進めていきます。この「人物」や「生き物」や「物」もふくめて、お話を作るのが作者の物語作りの仕事ということになります。

物語を作る作者が、頭の中で作った「人物」などに話をさせるとき、この「人物」などのことを「語り手」と言います。

この『わらぐつのなかの神様』の立ちどまり①の場面では、語り手は、マサエの家の茶の間にいます。そこから、見えること、聞こえることなどを語っていきます。(作者の杉さんが、マサエの家に実^{じっさい}際にいるのではないですね。作者と語り手のちがいが、こう考えるとよくわかりますね。)

自分の書きこみをふり返ってみよう(1)

びょうしゃ 描写とその言葉の意味づけ

まず、語り手は①「雪がしんしんとふっています。」と語り
ます。あなたは、どんな書きこみをして読んだでしょうか。

例えば、

「冬の話なんだな」「辺りは雪深いんだろうな」「ずっ
とふり続けているのんだろうな」「静かな感じがするな」

など書きこんでいることでしょう。

ところで、この一文は、まわりの**情景**を写し取るようにえ
がいています。このような**表現**の仕方を**描写**といいます。「写
し**描く**」ということです。

それでは、次の文②「マサエは、おばあちゃんといっしょに、
こたつにあたりながら、本を読んでいた。」も描写でしょ
うか。あなたはどう思いますか。

この文は、マサエを主語にして、マサエの行動をえがいた
文で、やはり語り手が描写という表現方法で語っています。

①の文は**情景描写**、②の文は**行動描写**と言えます。

ところで、描写されているか所を読むときに、知っておく
とよいことがあります。描写では、ある事物について写しえ
がくのですが、その全てについて写しえがいているのではあ
りません。

例えば、ここではマサエは、「おばあちゃんといっしょに」「こ
たつにあたりながら」「本を読んで」いるということは書かれ
ているのですが、マサエがどんなかみ形をしていて、どんな

服を着ているかまでは書かれていません。なぜ語り手は、そのことは、語らないのでしょうか。

実は、語り手に語らせる作者としては、その辺りは読者の想像そうぞうに任まかせておきたいのです。これこれと決めておく必要がないのです。もっと言えば、この物語を書き進む上で、決めておく必要がないのです。

そうだとすると、逆ぎやくに、作者が語り手に、ひとつの事物のその面を、なぜわざわざ取り上げて語らせたのか、そこにはどんな意味があるのかを考えてみると、より深く読み取ることができることがわかります。

では、具体的に考えてみましょう。

マサエが登場しますが、「マサエは」というように、マサエは主語で語られます。このことから、マサエがこの物語の主な登場人物なのではないかと思えます。この「は」の一言を、そんなふうに意味づけることができるのです。ですから、書きこみとしては、この「は」を丸でかこむなりして、

「主人公なのかな」

というような書きこみができるでしょう。

次に、「おばあちゃんといっしょに」という描写からは何がわかるのでしょうか。この家には、マサエの他におばあさんがいることがまずわかります。それとともに、「いっしょに」という所から、マサエにとっておばあさんがとても身近なそんな在ざいのように思えます。また他には、マサエは「おばあちゃんといっしょに」何をしているのか知りたくなります。書きこみとしては、

「おばあさんがお話に出てくるのか」「身近」「いっしょに何をしているのだろう」

というように書けるでしょう。

次は、「こたつにあたりながら」とあります。外は雪ですから寒いのでしょう。こたつなのですから、マサエとおばあさんはすぐ近くにすわっているのです。しかも、あたたかい家庭的なふん囲気を感じるかもしれません。書きこみとしては、

「あたたかみ」「^{だん}団らん」

などの言葉があるでしょう。

最後は、「本を読んでいた」ですが、ここでは、『どんな本を読んでいるのだろう』と考えるよりも、『本を読んでいるマサエはどんな子なのだろう』と考えるのがよいでしょう。すると、マサエは本を読むのが好きなのではないか、そういう^{せいかく}性格かそういう面を持っているのではないかと、意味づけることができます。

行動描写と言う表現方法では、人物の性格を直接^{せつ}言葉にしてえがくことはできません。例えば、「マサエは本を読むのが好きな子です。」という文は、マサエについて〈描写〉しているのではなく、〈説明〉していることになります。

ところで、「本を読んでいた」というところからは、マサエが、おばあさんといっしょに本を読んでいたことはわかりますが、では、おばあさんはこたつにあたりながら、何をしていたのでしょうか。おばあさんの^す過ごし方が分かれば、どんなおばあさんなのか、少しわかるかも知れません。

【問題 1】

③の「今夜は、おとうさんは泊まり番でかえってきません。」は、描写表現でしょうか、それとも別の表現でしょうか。あなたはどのように思いますか。

ア 描写表現 () 人

イ 描写表現ではない () 人

【問題 2】

④の「おふろずきのおじいちゃんは、『この寒いのに……』と、みんなにわらわれながら、さっきおふろ屋へでかけていきました。」は、描写表現でしょうか、それとも別の表現でしょうか。あなたはどのように思いますか。

ア 描写表現 () 人

イ 描写表現ではない () 人

【話し合い】

問題 1 と 2 について、みんなで話しあってみましょう。

話しあったあとで、もう一度、どちらにするか手をあげましょう。意見を変えてもよいのです。

自分の書きこみをふり返ってみよう(2)

説明

語り手は、茶の間にいるのでしたね。その茶の間には、お父さんのすがたも、おじいさんのすがたもありません。ですから、語り手は、お父さんやおじいさんのすがたを見て、その行動やようすを語っているのではないのです。ぶ台だと、ナレーターが、すがたが見えないお父さんやおじいさんのことを、観客に説明しているということになります。このような表現方法を〈説明〉といいます。

説明の部分でも、作者が語り手の口を借りて、必要なことだけを話しています。だから、《お父さんがどんな仕事をしているのか》とか、《おじいさんが何才なのか》とかは、言葉から読み取れなければ、ここでは意味のないことと考えればよいでしょう。それよりも、《二人ともいない》ということを行っているのですから、ここで《二人ともいない》ことの意味を考えておくと、ひょっとしたら、この場面の^{せってい}設定に何か仕かけがかくされていて、やがて読み進んでいく中で、はっきりしてくるのかも知れません。

また、《二人ともいない》ことは同じなのですが、お父さんについては、とてもあっさりとした表現です。それに対して、おじいさんについては、「(家族の) みんなにわらわれながら」と語られています。この表現から、おじいさんと家族の関係が読み取れそうなのですが、この「わらい」がどんな意味があるのかを、考えて書きこむのも楽しいものです。

【話し合い】

書き出したことを発表しましょう。

自分とはちがう意見を書き留めておきましょう。

【音読】

立ちどまり①を時間いっぱい何回も音読しましょう。

立ちどまり②を書きこみをしながら読みましょう。

立ちどまり②：マサエはふと思いでして……まだ、びしょびしょみただよ。
12の文またはまとまりがあり、それぞれに番号をつけています。

① マサエはふと思いでして、台所のおかあさんをよびました。

② 「おかあさん、わたしのスキーぐつ、かわいてる？ あした、学校のスキー

の日だよ。」

③ おかあさんが、水音をたてながらこたえました。

④ 「おや、あしただったの。それじゃ、もう一度見てごらん。さつき、新聞紙

をまるめていれといたから、大まかにみてほとんど全部の意味あらかたかわいたと思うけど。」

⑤ マサエは夕方まで、友だちと、近くの丘おかでスキーをしていました。⑥ きょう

は一度しかころばなかったの、スキーぐつもズボンも、そんなにぬれないつもりでしたが、かえってきてみたら、やっぱり、いつものようにぐっしよりになっていたのです。

⑦「かわいてるといいけどな。あんなにおそくまで、すべてなきやよかった。」

部屋と部屋を仕切る戸
などの下にある横木

⑧マサエは、ひとりでそんなことをいいながら台所へかけて行って、しきいに

たてかけてあるスキーぐつから、しめっばい新聞紙の玉を五つ六つとりだして、手をつつこんでみました。⑨くつのなかは、じわりとつめたくて、背^{せなか}中までぶるっ

となりそうです。

⑩ 「うへえ、つめたーい。おかあさん、どうするう。」

⑪ 「あたらしい新聞紙とかえてごらん。ひものところも、しっかりくるむよう

にしてね。あしたまでには、なんとか、かわくだろ。」

⑫ 「かわくかなあ。なんだか、まだ、びしょびしょみたいだよ。」

会話

さて、ここでもう一度、表現方法について考えてみましょう。この立ちどまり②では、もう一つの表現方法が出てきます。それは、〈会話〉という表現方法です。

物語では、この「会話」がふんだんに取り入れられて、お話を進んでいきます。

会話には、描写や説明にはない特ちょうがあります。

会話という表現方法を使えば、その人物の思い、考え、感じ方などを直接本人の言葉で語らせることができます。言葉づかいも、その人物を考える上で、重要な要素^そにできます。それらから、語り手はその人物の性格なり、人物像を読み手に感じ取らせることができるのです。

今自分がした書きこみのことを考えてみると、確かにマサエやお母さんの会話の言葉に反応して、『マサエはどんな子なのだろうか』とか、『お母さんはどんな人だろうか』と考えたことでしょう。

もし、説明という方法で、マサエはこんな子ですとか、お母さんはこんな人です、などと書かれていたらちっともおもしろくないでしょう。また、行動を描写という方法で、その人物の性格までわかるように書こうとすると、あれこれと人

物の行動なりを書かないといけないでしょう。

ところで、会話が、描写や説明とはちがう点をもうひとつ書き加えておきましょう。

会話は、語り手が、その人物の^{せきにん}責任で語らせることができます。これに対して、描写や説明は語り手が必要なことを選びだして語っているのですから、語り手自身の責任で語っているといえます。

ですから、描写や説明の部分では、全てのことは語りませんが、語っている事がらそのものには「うそ」のようなものはありません。けれども、会話では、語り手は、その人物自身の責任で語らせるのですから、その人物が「うそ」をつくこともあるのです。

してん
視点

⑨の文を読んだとき、本当に「ぶるっ」と冷たさを感じた人がいたのではないのでしょうか。どうしてそのように感じるのか、それには仕かけがありそうです。

立ちどまり②では、描写の部分を見ると、マサエの行動については、マサエを主語にして語っています。お母さんの行動については、お母さんを主語にして語っています。ですが、お母さんを主語にしている文はひとつしかなく、マサエを主語にして語っている文の方が多いのです。そこに仕かけがあるのです。

読み手は、マサエの行動を追い、いつのまにかマサエと一しょになって見聞きしているかのように感じるようになるのです。そこで、語り手が、マサエの感覚でくつの中を描写すると、読み手自身がそのように感じるのです。

このように読み手が、ある人物に重なったり、**寄り**そったりして文章を読むことを、その人物の**視点**で読むといいます。読み手をぐんぐんと物語の中の人物と一体化させる仕かけ、それが視点の役わりといえます。

読み手^{しゅたい}主体の読み

立ちどまり②には、読み手をマサエの視点で読ませる仕掛けがあると述^のべましたが、それではマサエになり切ってしまったら、どういうことになるのでしょうか。

そうになってしまうと、マサエが自分について気がつかないことは、読み手も気がつかないということになります。

しかし、実際には読み手は、マサエの言動を外側から見る目も持っています。マサエの言動を読んで、「それはちょっとちがうんじゃないの」と思ったり、「そんな言い方、わたしならしないよ」と思ったりします。

つまり、わたしたちが読書をする過^{かてい}程では、登場人物になりきって物語を体験する一方で、登場人物からはなれてその人物を外側から見て評^{ひょうか}価したりしているのです。

立ちどまり②の場面で、マサエについて考えるとき、大切なことはマサエを外側から見て評価することです。そうしてはじめて、自分と比^{くら}べることができるようになり、また、自分のふだんのすがたをこえて、広く一ぱん化して考えることもできるようになるのです。

あるときは人物の視点で読み、またあるときはその人物を外側から見て評価して読む、そしてこれらのことが自由にできる、このような読みのことを「読み手主体の読み」といいます。

【音読】

立ちどまり②を時間いっぱい何回も音読しましょう。

【話し合い】

マサエについて話し合しましょう。あなたは、マサエについて、どんな書きこみをしていますか。書きこみを元にして、「読み手主体の読み」にちょう戦してみましよう。

発表するときには、「何番の文の何々のところで」というように前置きをしてから発表します。

例えば、⑤の文の「夕方まで」という言葉から考えたことであれば、

「⑤の夕方まで のところで、暗くなるまでずっと遊んでいたということだから、マサエは〇〇な女の子だと思います。」

というように発表します。

大人も書きこみをする

ところで、「書きこみ」って、めんどうだ、じゃまくさい、と思っている人はいませんか。中には、先生がしなさいと言うから仕方なくしているのだ、という人がいるかもしれません。

しかし、書きこみは、しっかり文章を読んで理^{かい}解しようとするれば、自然にたくなるものなのです。言葉や文章をよりくわしく読み取ったり、逆にまとめている言葉や文章を見つけた時に、その言葉や文章の横に何か印や言葉などを書きこんでおきたくなったことはないでしょうか。

大人でも、ちょっとむずかしい本を読む時には、本に線や言葉などを書きこみながら読むのがふ通です。ですから、子どもだから書きこみをさせられているとか、学校の国語の勉強だから書きこみをしているとかいうことではありません。

できれば、先生が書きこみをしながら読んだ本を実際に見せていただきますよう。

それでは、書きこみをしながら、立ちどまり③を読み進みましょう。

立ちどまり③：すると、茶の間のこたつから……迷信でしょ、おばあちゃん。」

11の文またはまとまりがあり、それぞれに番号をつけています。

①すると、茶の間のこたつから、おばあちゃんが口を出しました。

②「かわかんかったら、わらぐつはいていきなさい。わらぐつはいいど、あつたかくて。」

③「やだあ、わらぐつなんて、みったぐない。だれもはいてる人ないよ。だいいち、

大きすぎて、かなぐ金具にはまらんわ。」

④マサエは、大きな声でいいながら、たんすのそばにかさねてある新聞紙をとってきて、くるくるまるめては、せつせとスキーぐつのなかにつめこみました。⑤ぎゅうぎゅう力を れておしこむと、ぬれたビニール皮がわがぽっこりと

ふくらんで、まだいくらでもはいりそうです。

⑥おばあちゃんが、またいいました。

⑦「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あつたかいし、かるいし、すべらんし、そうそう、それに、わらぐつのなかには、神様がいなさるでね。」

⑧「わらぐつのなかに、神様だつて？」

⑨マサエは新聞紙の玉をすっかりつめこんでしまって、こたつへもどつてきました。⑩ぬれたものをいじった手が、つーんとこおりそうです。

⑪「そんなの迷^{めい}信^{しん}でしょ、おばあちゃん。」

【音読】

立ちどまり③を時間いっぱい何回も音読しましょう。

【話し合い】**《テーマ1》**

③の文「やだあ、わらぐつなんて、みったぐない。だれもはいてる人ないよ。だいいち、大きすぎて、金具^{かなぐ}にはまらんわ。」のところで、あなたはどんな書きこみをしていますか。話し合しましょう。

発表するときには、この文のどの言葉からそのように思ったかを言ってから発表しましょう。

《テーマ2》

⑦の文「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あったかいし、かるいし、すべらんし、そうそう、それに、わらぐつのなかには、神様がいなさるでね。」のところで、あなたはどんな書きこみをしていますか。話し合しましょう。

発表するときには、この文のどの言葉からそのように思ったかを言ってから発表しましょう。

くわしい話しかえ

マサエが、台所でスキーぐつが明日までにかわくかどうか心配しているときに、茶の間からおばあさんが口をはさみます。「わらぐつをはいていきなさい」というのです。そもそもわらぐつがスキー板の金具にはまるはずがありません。そうこうしているうちに、おばあさんはまた、「わらぐつはいいもんだ」と言い始めます。そのうえ、わらぐつのなかには神様がいるとまで言いだすしまつです。おばあさんの言っていることは、スキーぐつが気になっているマサエにとっては、何かずれているし、神様を持ち出すなんてまるでわけがわかりません。それで、⑩「そんなの^{めいしん}迷信でしょ、おばあちゃん。」となったわけです。

ところで、この立ちどまりでのマサエの言葉としては、③と⑧と⑩の3か所ですが、マサエは頭の中ではもっといろいろなことを思いながら行動していたはずです。そこで、マサエにわらぐつや神様について、もっとくわしく話をさせてみましょう。あなたがマサエになって書きます。おばあさんに話しかけるように話すところも作るとよいでしょう。

【話し合い】

何人かのくわしい話しかえを聞き比べて話し合しましょう。

【音読】

立ちどまり③をもう一度音読しましょう。今回はできるだけゆっくり読みながら、勉強したことがたくさん頭の中にかんでくるようにします。先に読めた人は、ゆっくり読む読みに何回もちょう戦してみましょう。

それでは、書きこみをしながら、立ちどまり④を読み進みましょう。

立ちどまり④：「おやおや、なにが迷信なもんかね……こんな話をはじめました。」

7つの文またはまとまりがあり、それぞれに番号をつけています。

① 「おやおや、なにが迷信なもんかね。しょうしんしょうめい、ほんとの話だよ。」

② おばあちゃんは、まじめな顔になって、めがねをはずしました。

③ 「それじゃあ、ひとつ、わらぐつの話をしてやるかね。わらぐつのなかに神様のいなった話をね。」

④ そこへ、おかあさんも台所をすませて、赤くなった手をふきふき、こたつへはいつてきました。

⑤ 「どれどれ、わたしもきかせてもらいましょうかね……そういえば、おじいちゃ

んは、おふろ、おそいわね。こんでるのかしら。」

⑥ 「なあに、おじいちゃんはむかしから長湯ながゆがすきでね。こもうとこむまいと、

ゆっくりたのしんでなさるのさ。じゃあ、話そうかね。」

⑦ おばあちゃんはそういつて、雪の音にちよつと耳をすましてから、こんな話をはじめました。

短い話しかえ

この物語の初めから立ちどまり④までをふり返って、短く話しかえてみましょう。

だれかまだこの物語を読んでいない友だちがいると^か仮定して、その友だちに「どんな話なの？」とたずねられたら、どう答えたらよいかを考えてみます。

あなたはきっと、この物語の初めからここまでのところを全て同じように思い出しはしないでしょう。いくつかの場面やある場面が思いうかびますが、そのことをいきなり話しても、友だちには伝わりにくいでしょう。そこで、思い浮かんだ場面の前後や話のすじも入れて話すことになります。

ここでいう「短い話しかえ」とは、物語を大まかに初めから順を追って思い出して話していくことではありません。ここまでの話で自分が最も大切だと思ったところ、それは、すぐに思いうかぶ場面であることが多いと思いますが、その大切だと思うところを中心にして、この話を短く話しかえます。

その際、文章の意味を考えて、文中にはない自分の言葉に置きかえて書くと、長い文章も短くまとめることができます。

(例)

おばあちゃんは、まじめな顔になって、めがねをはずしました。

⇒ おばあさんは、急に真けんになりました。

また、会話の部分は、そのまま書くのではなく、会話の意味を考えて別のことばに置きかえるとよいでしょう。

(例)

「どれどれ、わたしもきかせてもらいましょうかね……そういえば、おじいちゃんは、おふる、おそいわね。こんでるのかしら。」「なあに、おじいちゃんはむかしから^{ながゆ}長湯がすきでね。こもうとこむまいと、ゆっくりたのしんでなさるのさ。じゃあ、話そうかね。」

⇒ おじいさんはしばらく帰ってきそうにありません。

以上、短く話しかえるときのポイントをまとめると、

- (1) 最も大切なことは何かを考えて書く。
- (2) 話の順に書かなくてよい。
- (3) 自分の言葉に置きかえて短くまとめて書く。
- (4) 会話は、その意味を考えて別のことばに置きかえる。

となります。ただし、会話や文章によっては、そのまま使う方がよい場合もあります。(3)と(4)は、その時々で考えてみてください。

【話し合い】

何人かの短い話しかえを聞き比べて話し合しましょう。

小見出し

立ちどまり①から④までを短く話しかえましたが、今度はさらに短く話しかえましょう。もし、できるようならひとつの文にまとめます。

この短く話しかえた文のことを「**小見出し**」と言うことにします。「小見出し」は、ここまでの題のようなものです。小見出しを見ただけで、大切な内容ようがわかるように書きます。

小見出しは、短い言葉にしようとしなくて、短い文にすると作りやすいでしょう。

では、ここまでのお話に小見出しを付けておきましょう。

【小見出し】**【話し合い】**

小見出しを発表しあいましょう。

音読と表現読み

音読は文字を追って読む読みです。一語一語はっきりと声を出して読みます。まずは、自分が文字を正確に読めるかどうか大切です。

ところが、書きこみや話し合いや話しかえなどをした後で、もう一度同じところを読んでみると、同じ文章のはずなのに感じ方がちがっていることに気づきます。

それはなぜなのでしょう。

実は、同じ言葉、同じ文章を読んでも、今度は、書きこみや話し合いや話しかえなどをしたことが、次々と頭の中にかんじかんでくるからです。

このように いろんなことを頭の中にゆたかに思いうかべながら、声を出して読むことを「**表現読み**」と言います。

「表現読み」では、自分が物語を味わいながら読みます。そして、自分になつ得るように読んでいきます。だれかに聞いてもらうことを主な目的にはしていません。自分の中に聞き手がいて、その聞き手に読んで聞かせているのです。ですから、わかりにくいところや、ゆっくり味わいながら読みたいところでは、少し間をとってから次を読み進むこともできます。

音読では、だいたい同じ速さですらすら読むことが多いのですが、表現読みでは読む速さは問題ではありません。表現読みをしているときは、どちらかという、ゆっくり読んでいる人ほど、文章をゆたかに楽しみながら読んでいることになります。

それでは、立ちどまりの①から④までの「表現読み」にちょう戦みましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

*

——むかし、この近くの村に、おみつさんというむすめが住んでいました。

おみつさんは、とくべつ　しいむすめというわけでもありませんでしたが、か

らだがじょうぶで、人に対するその人の心の持ち方。性質。気だてがやさしくて、いつもほがらかにくるくるとはたら

いていたので、村じゅうの人たちからすかれていました。

雪げた

げたは、今から50年ほど前までは日常にちじょうのはき物として用いられてきました。げたには多くの種類がありますが、雪深いにいがた新潟県じょうえつの上越とよばれる地方には、ハコゲタがあります。これ



雪げたの一種「ハコゲタ」の底
(日本はきもの博物館蔵)

これは、江戸時代の中ごろに考え出されたといわれる雪げたの一つで、雪がげたの歯の間にはさまらないように、前歯をなくして後歯だけにしたものです。この歯のない前半分は、箱形の空どうになっており、はなみずおの結び目から雪の水気が伝わってこない

よう、ふたでしっかりとぎされています。つま先は、雪が入らないように皮(つまかわ)などでおおわれています。高級品は、桐きりという軽い木でできた台にうるしをぬり、犬の毛皮



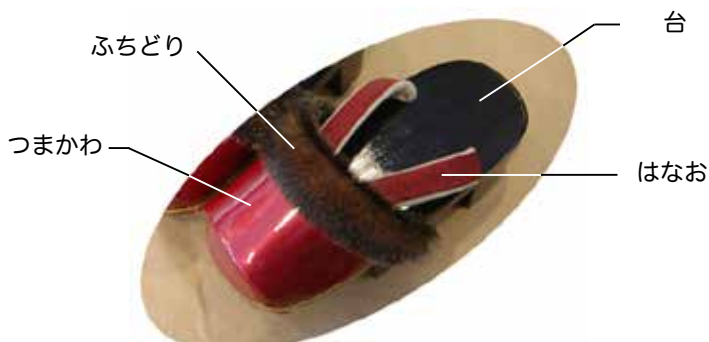
女性用の雪げた 右の写真は組み立てる前の部材です
(写真提供: 和装はきもの・小物 加藤商店 <http://wasokato.typepad.jp>)



かわいい雪げたのミニチュア
(日本はきもの博物館蔵)

をつけます。また、雪道ですべらないように、歯にくぎなどのすべり止めの金具をつけます。

この物語の作者の杉みき子さんは、この上越地方で生まれて育ち、今でも住んでおられます。



各部の名前

それでは、書きこみをしながら、立ちどまり⑤を読み進みましょう。

立ちどまり⑤の1：—むかし、この近くの村に……村じゅうの人たちからすかれていました。

番号はつけていません。

立ちどまり⑤の2：さて、このおみつさんが……よびかけているように思われました。

8つのまとまりまたは文があり、それぞれに番号をつけています。

① さて、このおみつさんが、ある秋の朝、町の朝市へ、野菜を売りにでかけました。

もう冬が近いので、すれちがう人たちも、なんだか**気ぜわし**そうに前かがみに

気があせて落ちつかないようす

なって歩いていきます。おみつさんの足も、それにつられたように、しぜんとはやくなりました。

② 町へはいるとすぐの四つかどに、げた屋さんがあって、大きなげたのかたち

古くなってよごれた色になる

をした、**すすけた**かんばんがでています。その前をとおるとき、おみつさんは

ふと足をとめました。り口近くの台の上に、かわいらしい雪げたが一足そくかざつ

てあるのが目についたのです。

③ 白い、かるそうな台に、ぱつと明るいオレンジ色のはなお。上品なくすんだ

赤い色のつまかわは、黒いふっさりとした毛皮のふちどりでかざられています。
身なりを美しくかざること
見ただけで、若いむすめさんの、はなやかな冬のよそおいが、目の前にうかん
でくるようです。

④おみつさんは、その雪げたがほしくてたまらなくなりました。

(でも、きつと高いんだらうな?)

冬、寒さなどのために手足のひふが

うらがえしになっている値段ねだんの札を、あかぎれの指でそつとめくってみると、
かわいてひびがはいる状態じょうたい

思ったとおり、とてもとても、おみつさんのこづかいで買える値段ではありま
せん。

(まけてくれといったって、とてもだめだらうしねえ……。)

⑤ おみつさんは、しばらくそこにたつて、すいつけられたようにその雪げたをながめていました。

⑥ 「いらっしやい。なにをあげますかいね？」

おみつさんがあんまり長いことたっていたので、店のおくからおかみさんがでてきて声をかけました。おみつさんは、まっかになつて、口のなかでなにかもごもごいいながら、にげるように店の前をはなれました。

⑦ けれども、市いちで野菜を売っているあいだも、あの雪げたのことが、おみつさんの頭をはなれません。いつもは、よけいなものなど、ほしいと思ったことのないおみつさんなのに、どうしたことか、この雪げたばかりは、なんとしても

あきらめられないのです。

⑧市のかえりに、おみつさんは、またあのげた屋の前をとおりました。ほかのお客にまぎれて、ちらりと目をやると、赤いつまかわの雪げたは、朝とおなじところに、ちゃんとぎょうぎよくなっています。

(ねえ、わたしを買ってください。あんたが買ってくれたら、うれしいな。)
おみつさんには、雪げたがそうよびかけているように思われました。

【音読】

できるだけゆっくり、何回も音読をしましょう。

【話し合い】**《区分1》**

③の前半は、雪げたについての描写になっています。ここで注意して読みたいことがあります。それは、おみつさんが雪げたのどこを見ているかです。

ここの描写では、まず「白い、かるそうな台」を見えています。白い色は、はなおやつまかわやふちどりの色を引き立たせていますが、この白い色からは軽い高級な素材である桐きりを使っていることがわかるのです。おみつさんは、まず、この雪げたの高級なか価ちを見たことになります。

それから、はなおからは色のはなやかさ、つまかわからはその色からくる上品さ、ふちどりからはふっさりとした感じよくと美しさを見えています。

しかし、おみつさんは、その雪げたの他の面を見てはいません。あとで値段ねだんの札をめくってみる機会があったのですが……。

それでは、③の書きこみを発表しましょう。

【話し合い】

何人かの短い話しかえを聞き比べて話し合しましょう。

【小見出し】

立ちどまり⑤に小見出しをつけましょう。

【話し合い】

小見出しを発表しあいましょう。

【表現読み】

立ちどまり⑤の表現読みにちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

書きこみをしながら、立ちどまり⑥を読み進みましょう。

立ちどまり⑥：家にかえったおみつさんは……その夜、おみつさんは考えました。
5つの文またはまとまりがあり、それぞれに番号をつけています。

①家にかえったおみつさんは、思いきって、おとうさんとおかあさんに、雪げたのことをたのんでみました。

②「なんだ、雪げたなんて、町のむすめっ子のはくもんだ。百姓ひやくしやうのむすめにや、ぞうりか、わらぐつでたくさんだ。」

おとうさんは、そういって、相手にしてくれません。

③「ものねだりをしたことのないおみつのことだから、買ってやりたいのはやまやまだけどね……。まあ、おまえが町へおよめにいくようなことにでもなつたらね……。」

はつきり言わないこと

おかあさんは、ことばをにごしています。

④ 「ねえちゃんが買うんなら、おらにも買って。」

「きれいな雪げた、あたいもはいてみたいな。」

小さい弟と妹がわいわいいいだしたので、おみつさんも、もう自分のねだりごとどころではなく、いっしょうけんめい、子どもたちのなだめ役にまわらなくてはなりませんでした。

⑤ その夜、おみつさんは考えました。

立ちどまり⑥では、「その夜、おみつさんは考えました。」で終わっていますが、おみつさんはどんなことを考えたのでしょうか。予想してみましょう。

予想するときには、これまでに読んだところと関連づけて、そのか所や事がらを予想の根きよとします。

まず、予想の根きよを書いてから、予想を書きましょう。

【予想】

〈予想の根きよ〉

〈予想〉

書ききれない場合は、うらを使っていいです。

【話し合い】

予想したことを交流しましょう。ただし、このお話を知っている人は、発表しないようにしましょう。友だちから物語を読む楽しみをうばってしまうからです。

【表現読み】

立ちどまり⑥の表現読みにちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

書きこみをしながら、立ちどまり⑦を読み進みましょう。

立ちどまり⑦：(うちの暮らしだって……元気よく町へでていきました。

5つの文またはまとまりがあり、それぞれに番号をつけています。

①(うちの暮^くらしだって、たいへんなんだもの。買ってもらえないのもむりはない。そうだ、自分ではたらいで、お金をつくろう。そして、あの雪^{ゆき}げたを買おう。)

②おみつさんのおとうさんは、わらぐつをつくるのがじょうずでした。おみつさんも、いつもそれを見ているので、つくりかたくらいはわかります。おみつさんは、さっそく、毎^{まい}晩^{ばん}、家の仕事をすませてから、わらぐつつくりをはじめました。

わけなくできる。かん単。

③おとうさんのつくるのを見ていると、たやすくできるようですが、自分でやってみると、なかなか思うようにはいきません。でも、おみつさんは、すこしくらいかっこうがわるくても、はく人がはきやすいように、あったかいように、すこしでも長持ちするようにと、心をこめて、しつかりしつかり、わらを編^あん

でいきました。

④さて、やっと一足づくりあげてみると、われながら、いかにもへんなかつこ

首をかたむけるようす

うです。右と左と、大きさもちがうし、なんだか首をかしげたみたいに、足首の上のところまがっています。底もでこぼこして、ちゃんとおいても、ふらふらするようです。そのかわり、上からつまさきまで、すきまなく、きつちりと編みこまれていて、じょうぶなことは、このうえなしです。

⑤「そんなみったぐないわらぐつが、売れるかいなあ。」

うちの人はそういつて、わらつたり心配したりしましたが、それでもおみつさんは、朝市のたつ日になると、野菜をいれた大かごにそのわらぐつをむすびつけて、元気よく町へでていきました。

【音読】

できるだけゆっくり、何回も音読をしましょう。

おみつさんは、自分で働いてお金を作ろうと考えました。わらぐつを作って売ろうというのです。おみつさんは、わらぐつの作り方は分かっていました。それに材料のわらもあります。そこで、毎晩、家の仕事をすませ^{まいばん}てから、わらぐつ作りを始めました。

【話し合い】**《区分 1》**

③の書きこみを発表しましょう。

《区分 2》

④の書きこみを発表しましょう。

【話し合い】

何人かのくわしい話しかえを聞き比べて話し合しましょう。

【小見出し】

立ちどまり⑦に小見出しをつけましょう。

【話し合い】

小見出しを発表しあいましょう。

【表現読み】

立ちどまり⑦の表現読みにちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

書きこみをしながら、立ちどまり⑧を読み進みましょう。

立ちどまり⑧：げた屋の前をとおるとき……ぶさいくなわらぐつを見つめました。
番号はつけていません。

げた屋の前をとおるとき、横目で見ると、あの雪げたは、まだちゃんとそこにありました。おみつさんは、その雪げたが、ほんのちよつぴり自分の手のとどくところへでてきたような気がして、たのしくなりました。

雪のふかい地方で、
のきからひさしを長
くはりだし、その下
を通路としたもの

それからまっすぐに朝市へでてきたおみつさんは、いつものがんぎの下に、むしろをひろげて野菜をならべ、そのはしっこにわらぐつをおきました。そして、野菜を買ってくれる人があると、

「わらぐつはどうですね。」

と、すすめてみるのですが、こちらはなかなか売れません。くすくすわらったり、

あきれた顔をしたりして、

「いいや、よかったでね。」

と、ことわるのはまだいいほうで、なかには、

「へええ、それ、わらぐつかね。おらまた、わらまんじゅうかと思った。」

などと、つつみかくしのないようすあけすけなことをいう、口のわるい人もいます。

(やっぱり、見かけのわるいもんは、だめなのかなあ。)

おみつさんはがっかりして、ぶさいくなわらぐつを見つめました。

【話し合い】

何人かのそう作話しかえを聞き比べて話し合しましょう。

【小見出し】

立ちどまり⑧に小見出しをつけましょう。

【表現読み】

立ちどまり⑧の表現読みにちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

書きこみをしながら、立ちどまり⑨の1を読み進みましょう。

立ちどまり⑨の1：やがて、お昼近くになって……つくんったのかね。」
番号はつけていません。

やがて、お昼近くになって、野菜はほとんど売れてしまったし、あきらめてもうかえろうかと思っていると、おみつさんのむしろの前に、若い男わかの人がたちました。どうやら、大工さんらしく、いせいのいいねじりはちまきに、大きな道具箱をかついでいます。

活気があること。ここでは、おみつさんには、ねじりはちまきをした大工さんがそのような見えたということです。

「あねちゃ、そのわらぐつ、見せてくんない。」

はずかしくなつて

その声をかけられると、おみつさんは、やはりきまりがわるくなつて、

「あんまり、みつともよくねえわらぐつで……。」

と、赤くなりながら、おずおずと、わらぐつをさしだしました。

若い大工さんは、道具箱をむしろの上において、そのわらぐつを手にとると、たてにしたりよこにしたりして、しばらくながめてから、こんどはおみつさんの顔をまじまじと見つめました。

「このわらぐつ、おまん（あなた）がつくんかったのかね。」

【話し合い】

《テーマ1》

大工さんについて、書きこんでいることを発表しましょう。

《テーマ2》

おみつさんについて、書きこんでいることを発表しましょう。

【問題3】

この大工さんは、おみつさんが作ったわらぐつを買うと思いますか。予想してみましょう。

ア わらぐつを買う () 人

イ 買わない () 人

【話し合い】

どうしてそう考えたかを、文章を根拠にして話し合いましょう。と中で予想を変えてもいいです。

書きこみをしながら、立ちどまり⑨の2を読み進みましょう。

立ちどまり⑨の2：「はあ、おらがつくったんです……おがみたいような気がしました。

番号はつけていません。

「はあ、おらがつくったんです。はじめてつくったもんで、うまくできねかったけど……。」

「ふうん。よし、もらつとこう。いくらだね。」

大工さんはお金をはらつて、わらぐつのひもを、なれた手つきでむすびあわせ、道具箱といっしょにひよいとかつぐと、さっさといつてしまいました。

おみつさんは、はじめてわらぐつが売れたので、うれしくてうれしくて、若い大工さんをおがみたいような気がしました。

【話し合い】

何人かの短い話しかえを聞き比べて話し合しましょう。

【小見出し】

立ちどまり⑨に小見出しをつけましょう。

【表現読み】

立ちどまり⑨の表現読みにちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

書きこみをしながら、立ちどまり⑩の1を読み進みましょう。

立ちどまり⑩の1：そのつぎの市の日までに……もうしわけなくて……。」
番号はつけていません。

そのつぎの市の日まで、おみつさんは、また一つ、わらぐつを編みあげました。まえのよりは、いくらかかたちよくできました。

(こんどもうまく売れるといいけど……。)

おみつさんが、わらぐつをもって市にでて、このまえのように野菜といっしょにならべておくと、こんどはあまり待たないうちに声をかけられました。

「そのわらぐつ、くんない。」

ひよいと顔をあげてみると、まあ、どうでしょう。それは、このあいだもわらぐつを買ってくれた、あの若い大工さんなのです。おみつさんはおどろきましたが、いわれるままに、またわらぐつを売って、お金をうけとりました。

そのつぎの市の日にも、またあの大工さんがきて、わらぐつを買ってくれま

した。そのつきも、またそのつきも……おみつさんが市へでるたびに、あの大工さんがかならずやってきて、ぶかつこうなわらぐつを買ってくれるのです。おみつさんは、いつのまにか、その大工さんの顔を見るのがたのしみになっていきましたが、そんなにつづけて買ってくれるのがふしぎでもあるので、とうとうある日、思いきってたずねてみました。

「あのう、いつも買ってもらって、ほんとにありがたいんだけど、あの、おらのつくったわらぐつ、もしかしたら、すぐいたんだりして、それで、しょっちゅう買ってくんるんじゃないんですか？　もし、そんなだったら、おら、もうしわけなくて……。」

この場面も、マサエのおばあさんは、おみつさんの視点で話をしています。ですから、おみつさんに分からないことは、読み手にも分からないのです。読み手であるあなたは、おみつさんといっしょになって、「そんなにつづけて買ってくれるのがふしぎ」になるのです。

さあ、若い大工さんはどんなふうに答えるのでしょうか。予想しておきましょう。

【予想】

〈予想の根きよ〉

〈予想〉

書ききれない場合は、うらを使っていいです。

【話し合い】

何人かの予想を聞き比べて話し合しましょう。

予想することの楽しみ

物語を読むときは、だれでも次がどうなるのかを楽しみにしています。そして、自然と予想をしています。その予想は、当たったり外れたりするのですが、多くの場合は外れるものです。当たるとうれしいこともあります。そればかりだとつまらないのです。それよりも、外れて、思ってもなかったふうにお話が進んでいく方が、わくわくどきどきおもしろいのです。本当のお話の楽しみは、「意外なてん開」（意味：思ってもなかったようにお話が進むこと）にあるのかも知れません。

書きこみをしながら、立ちどまり⑩の2を読み進みましょう。

立ちどまり⑩の2：すると、大工さんは、にっこりして……きゅうにまじめな顔になっていました。

番号はつけていません。

すると、大工さんは、にっこりしてこたえました。

「いやあ、とんでもねえ。おまんのわらぐつは、とてもじょうぶだよ。」

「そうですかあ。よかった。でも、そんなら、どうしてあんなにたくさん?……」
すると、大工さんは、ちよつと赤くなりました。

「ああ、そりゃ、じょうぶでいいわらぐつだから、仕事場のなかまや、近所の人たちのぶんも買ってやったんだよ。」

「まあ、そりゃどうも……だけど、あんなぶかつこうなわらぐつで……。」

申しわけなく思うさま

おみつさんがきょうしゆくすると、大工さんは、きゆうにまじめな顔になつていいました。

どうやら、わかい大工さんは、おみつさんが作るわらぐつが気に入っていたらしいのです。大工さんは、じょうぶでいいわらぐつだと思っています。それでも、おみつさんは、まだ「あんなぶかっこうなわらぐつで……」ときょうしゅくしています。

ところで、と中で大工さんは「ちょっと赤くなり」ますが、それがどうしてかは、書かれていません。マサエのおばあさんは、ここでもおみつさんに視点を置いていて、おみつさんが見聞きしたことしか話せませんから、それについては語れないのです。

大工さんはどうしてちょっと赤くなったのでしょうか。あなたは、どう思いましたか。

また、最後の方で、大工さんは急にまじめな顔になって話し始めるのですが、今度はどんなことを言うのでしょうか。続きを読むのがとても楽しみになってきますね。

書きこみをしながら、立ちどまり⑩の3を読み進みましょう。

立ちどまり⑩の3：「おれは、わらぐつを……夕焼けのように赤くなりました。
番号はつけていません。

「おれは、わらぐつをこさえたことはないけども、おれだってしやくにん職人だから、仕

事
のよしあしはわかるつもりだ。いい仕事ってのは、見かけできまるもんじゃ
ない。つかう人の身になって、つかいやすく、じょうぶで長持ちするようにつ
くるのが、ほんとのいい仕事ってもんだ。見かけもよけりや、それにこしたこ
とはないけどさ、なんたって仕事はこころがけだよ。おれなんか、まだ若僧わかそうだ
けど、いまにきつと、そんな仕事のできるいい大工になりたいと思ってるんだ。」
おみつさんは、こつくりこつくりうなずきながらきいていました。自分とい
く
らも年のちがわないこの大工さんが、なんだかとてもたのもしくて、えらい

人のような気がしてきたのです。

それから、大工さんはいきなりしゃがみこんで、おみつさんの顔を見つめながらいいました。

「なあ、おれのうちへきてくんないか。そして、いつまでもうちにて、おれにわらぐつつをつくってくんないかな。」

おみつさんは、ぼかんとして、大工さんの顔を見ました。そして、しばらくして、それが、おみつさんにおよめにきてくれということなんだと気がつくくと、白いほほが夕焼けのように赤くなりました。

【話し合い】

何人かのくわしい話しかえを聞き比べて話し合いましょう。

【問題 4】

このあと、おみつさんは大工さんのところへおよめに行ったのでしょうか。あなたはどう思いますか。

ア およめに行った () 人

イ 結こんを^{ことわ}断った () 人

【話し合い】

どうしてそう考えたかを、これまでのお話をふり返りながら、話し合いましょう。後で考えを変えてもいいです。

【小見出し】

立ちどまり⑩に小見出しをつけましょう。

【表現読み】

立ちどまり⑩の表現読みにちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。早くすわった人は、次はもっとゆっくり読みましょう。

書きこみをしながら、立ちどまり⑪の1を読み進みましょう。

立ちどまり⑪の1：「—それから、若い大工さんは……しあわせに暮らしてるよ。」
番号はつけていません。

＊

「——それから、若い大工さんはいったのさ。つかう人の身になって、心をこめてつくったものには、神様がはいっているのとおなじこんだ。それをつくった人も、神様とおなじだ。おまんがきてくれたら、神様みたいにだいじにするつもりだよ、つてね。どうだい、いい話だろ。」

おばあちゃんは、そういってお茶を飲みました。

「ふうん、そいで、おみつさん、その大工さんのところへおよめにいったの？」

マサエが、目をくりくりさせてききました。

「ああ、いったともさ。」

「それで、大工さん、おみつさんのことを、神様みたいにだいじにした？」

「そうだねえ、神様とまではいかないようだったけど、でも、とてもやさしくしてくれたよ。」

「ふうん。じゃあ、おみつさん、しあわせに暮らしたんだね。」

「ああ、とっつてもしあわせに暮らしてるよ。」

【話し合い】

何人かの書き出しを聞き比べて、「神様」とはどういうことなのか話し合しましょう。

【ひみつの書き出し】

この立ちどまりの最後まで読んで、何かピンとくるものがあった人は、そのことを書き出しておきましょう。ヒントは、文末の表現にあります。今は友だちにもひみつですよ。

書きこみをしながら、立ちどまり⑩の2を読み進みましょう。

立ちどまり⑩の2：「暮らしてる？……あの箱をもってきてごらん。」
番号はつけていません。

「暮らしてる？　じゃ、おみつさんって、まだ生きてるの？」

「生きてるともね。」

「へえ。どこに？」

おばあちゃんはにこにこわらっています。マサエは、おかあさんの顔を見ました。おかあさんも、にこにこわらっています。

「へんなの。おしえてくれたっていいでしょ。」

そこで、おかあさんがいいました。

「マサエ、おばあちゃんの名まえ、知ってるでしょ。」

「うん。おばあちゃんの名まえは、山田ミツ……あつ。」

マサエは、ぱちんと手をたたいて、目をかがやかせました。

「おみつさんで、それじゃ、おばあちゃんのことだったの。あら、じゃあその大工さんで、おじいちゃん？」

おばあちゃんはうなずいて、おしいれのたなの上をゆびさしました。

「あの箱をもってきてごらん。」

そういえば、読者であるあなたには、マサエのおばあさんの名前は知らされていなかったのですね。ですから、マサエよりも早く、おみつさんがおばあさんだ、とは気がつかないようになっていました。それは、この物語の作者がそのように考えて仕組んだことでした。語り手におばあさんの名前をわざと語らせなかったということです。

でも、何人かの人には、マサエよりも早くおみつさんがおばあさんだと気づきました。実は、それも作者が仕組んだことなのです。

さて、おばあちゃんは、おしおのたなの上をゆびさして、マサエに「あの箱をもってきてごらん。」と言います。

この箱の中には何が入っているのでしょうか。箱を開ける前に、マサエになって箱の中を予想してみましよう。

【予想の書き出し】と【話し合い】

書きこみをしながら、立ちどまり⑩の3を読み進みましょう。

立ちどまり⑩の3：マサエは、すぐふみ台をもってきて……〔終わりまで〕
番号はつけていません。

マサエは、すぐふみ台をもってきて、たなの上から、ほこりだらけのボール箱をおろしてきました。あけてみると、つーんとかびくさいにおいがして、赤いつまかわのかかったきれいな雪げたが、きちんとならんでいました。

「あら、きれいだ。かわいいね。」

「このうちへおよめにくるとすぐ、おじいちゃんが買ってくれたんだよ。だけど、あんまりうれしくて、もったいなくてね。なかなかはく気になれなかった。かざりものじゃないんだぞって、おじいちゃんにわらわれたけど、そのうちにそのうちにと思ってるうちに、年をとってしまっただね。どうどうそれっきりはか
ずじまいさ。」

「ふうん。だけど、おじいちゃんが、おばあちゃんのために、せつせとはたら

いて買ってくれたんだから、この雪げたのなかにも、神様がいるかもしれないわね。」

「ああ、きつといなるだろうね。だから、はけなくなっても、こうしてだいにしまつとくんだよ。」

ねった土をたたき固めて仕上げた土間。
またはコンクリートで固めた土間。

そのとき、玄関げんかんのたたきで、カツカツと雪げたの雪をはらう音がしました。

「おや、おじいちゃんのおかえりだよ。」

マサエは、赤いつまかわの雪げたをかかえたまま、

「おかえんなさーい。」

とさけんで、玄関へとびだしていきました。

【話し合い】

そう作話しかえを交流しましょう。

【小見出し】

立ちどまり⑩に小見出しをつけましょう。

【表現読み】

物語の初めから終わりまでの表現読みにちょう戦しましょう。ゆっくり読むようにしましょう。

「全文感想・意見」と「副題」つけ

このお話を読み終えるにあたって、「全文感想・意見」と「副題」つけをしましょう。

「全文感想・意見」では、このお話全体をふり返って自分の考えをまとめます。この「全文感想・意見」の場合も、「短い話しかえ」の時そうであったように、お話のあらすじを書くではありません。『わらぐつのなかの神様』を読み終えて、自分が最も言いたいと思ったこと、大切だと考えたこと、心を動かされたことなどをテーマにします。

ところで、この「全文感想・意見」にも題をつけますが、その題をそのまま『わらぐつのなかの神様』の「副題」とします。副題は、少し長めに書いて、その副題を読めば「全文感想・意見」の内ようがわかるようにします。副題は、「小見出し」と同じように、文で書くとよいでしょう。

副題付きの「全文感想・意見」が書けたら、友だち同士で読み合いましょう。その後、友だちの「全文感想・意見」について、自分の感想や意見を書きましょう。(用紙は後で先生からいただきます。94 ページ)

『わらじつのはかの神様』を読んで
名前

副題…

名編()

()
()

もうひとつの雪げたのお話

「^{こうふくがく}考福学のすすめ ふくいのお宝」サイトより (<http://kofukugaku.pref.fukui.jp>)

「福井県の宝」提きょう者の長原みゆさん(取材当時 79 才)は、いかにも気さくなおばあさんといった感じの方で、次のように話してくれました。

生まれは^{にいがた}新潟県、父親が病気で家が^{まず}貧しく、兄弟も 7 人と多かったので小学校を出て 13 才の時から^{ぐんま}群馬県などの^{せいし}製糸工場に働きに出ました。年ごろになって^{まんしゅう}満州(現在の^{ちゅうかじんみん}中華人民共和国の^{きょうわこく}東北地方)で働いていた同じ県生まれの夫の所にとつぎましたが、よめ入り道具などもってゆけず、母親がもしもの時に使いなさいと着物の中に 50 円をぬい込んでくれました。……(^{しょうりやく}省略)



雪げたとぞうり

ここまで話された時、昔のことを思い出されたのか目からなみだがあふれていました。

さて雪げたですが、自分たちはわらで編んだぞうりのようなもの(写真右上)で歩きましたが、お金持ちは^{きり}桐の雪げたをはいており、とてもうらやましく感じていましたが、戦争が終わった直後に知り合いからゆずってもらい、願いがかな

ふろく

い今まで^{ほかん}保管（大切にしまっておくこと）していました。

以上がおばあさんの話ですが、その雪げたはつま先に毛皮のおおいがしてあって、はな^おのあなを通してそこから水がしみ込まないように底が桐の^{あつ}厚い板でおおっており、かかどには鉄のくぎのすべり止めがついています。



長原 ゆみ さん

おばあさんにとってわすれられない宝物といえます。(佐々木)

(一部原文を^{かつあい}割愛し、^{むず}難しい言葉などを書きかえています)

このテキストに出てきた5年生の漢字(1)

漢字	出てくるページ		説明の中の言葉	物語の中の言葉
	説明	物語		
編	2	54	短編集	わらを編む
綿	2		木綿	
布	2		正方形の布	
応	3		反応	
留	4		書き留める	
確	4		確かな 正確	
際	6		実際	
情	7		情景	
現	7		表現	
像	8		想像	
任	8		任せる 責任	
逆	8		逆に	
在	8		そん在	
団	9		団らん	
性	9		性格 性質	
格	9		性格	
接	9		直接	
過	9		過ごし方 経過 過程	
設	11		設定	

このテキストに出てきた 5 年生の漢字 (2)

漢字	出てくるページ		説明の中の言葉	物語の中の言葉
	説明	物語		
素	17		要素	
責	18		責任	
寄	19		寄りそう	
述	20		述べる	
程	20		過程	
評	20		評価	
価	20		評価 価ち	
比	20		比べる	
解	23		理解	
迷	27	25	迷信	迷信
仮	32		仮定	
容	35		内容	
質	37		性質	
常	39		日常	
提	39		提きょう	
状	42		状態	
態	42		状態	
価	45		価ち	
職		74		職人

このテキストに出てきた 5 年生の漢字 (3)

漢字	出てくるページ		説明の中の言葉	物語の中の言葉
	説明	物語		
断	77		断る	
貧	95		貧しい	
群	95		群馬県	
製	95		製糸工場	
略	95		省略	
保	96		保管	
厚	96		厚い板	

【感想】

名前_____

この勉強は、楽しかったですか。下のア～オに○をつけましょう。

ア たいへん楽しかった

イ 楽しかった

ウ 楽しくもつまらなくもなかった

エ 楽しくなかった

オ 全然楽しくなかった

【付記】

この手紙はお手紙をふりかきつての記念です。

おれらの中の神様、いつかは多くの先生方から

熱心な授業をうけてほしいです。また子をもつから

たぐいん年級をいろう。とでも嬉しく思おうから

今回の授業アプリについての申し出。私の方は

少くも差支えをふりません。とる名に自由は

お便りにいろうと下すから

夏休みのころも先生方は何ごもお忙しうござい

ます。お元気でいろうと下すからお便りに

とる名に自由は

い

お

大月正雄 様

主な研究文献

- 「かくまきの歌」(作 杉みき子 画 村山陽 フォア文庫 童心社)
- 「教科書にでてくるお話 5年生」(監修 西本鶏介 ポプラ社)
- 「今から始める一読総合法」(児童言語研究会 編 一光社)
- 「一読総合法入門」(児童言語研究会 編 明治図書)
- 「新・一読総合法入門」(児童言語研究会 著 一光社)
- 「国語教育の過去・現在・未来像」(大木正之 編著 一光社)
- 「一読総合法の実践入門 その系統的指導」(林進治 著 一光社)
- 「文芸学入門」(西郷竹彦文芸教育著作集2 明治図書)
- 「新訂文学読本 はぐるま 指導の手引」(部落問題研究所 編)
- 「新訂文学読本 はぐるま 5」(部落問題研究所 編)
- 「文芸研の授業②文芸教材編『わらぐつの中の神様』の授業」(西郷竹彦 監修 高橋睦子 著 明治図書)
- 「最新版 西郷竹彦 教科書指導ハンドブック 子どもの見方・考え方を育てる 小学校高学年・国語の授業」(西郷竹彦 著 明治図書)
- 「意味を問う教育 一文芸教材をゆたかに、深く読む」(西郷竹彦 著 明治図書)
- 「国語の本質がわかる授業⑤ 文学作品の読み方Ⅱ」(柴田義松 監修 阿部 昇・小林義明 編 日本標準)
- 「読みの授業の基礎理論 小学校編 一読総合法による文学の読み」(岩田 道雄 著 一光社)
- 「一人読み・話し合いで『読みの力』を育てる」(藤田 伸一 著 国語セレクト 6 学事ブックレット 学事出版)
- 「国語の授業」誌 No.30 (1979年2月 児童言語研究会編集 一光社)
- 「国語の授業」誌 No.77 (1986年12月 児童言語研究会編集 一光社)
- 「国語の授業」誌 No.82 (1987年10月 児童言語研究会編集 一光社)
- 日本はきもの博物館 (財団法人 遺芳文化財団 広島県福山市松永町4丁目 16-27)
- 和装はきもの・小物 加藤商店 <http://wasokato.typepad.jp>
- 「^{こうふくがく}考福学のすすめ ふくい^の宝」 <http://kofukugaku.pref.fukui.jp>